

奨学金が学生を 骨抜きにしていく力は何か。

BY デルボス

ブラック・ブラザーズに誘われて「奨学金がローンってありなのか？Global Week of Action2009!! 教育を取り戻せ」に参加して喋ってきました。シンポジウムの詳細は他のルーちゃんに譲るとして、ここでは奨学金が学生を骨抜きにしていく力とは何なのかを、シンポジウムで出会った沢山の人の言葉と行動に触発されつつ、考えたいと思います。

そもそもscholarshipやgrantと翻訳され、貰えて返済不要であった奨学金は、新自由主義的な再翻訳により奨学金=loanと読み替えられてしまうことで、学生というものを再主体化する装置として機能し始めたのではないのでしょうか。

例えば、ものを買うときのことを考えてみましょう。何か商品を買うとき、ふつうはお金がないと買えません。

「嗚呼、あと10円あればガリガリ君が食べれたのに……」

という経験は、多くの人が共有できることではないのでしょうか。一見あたり前のことですが、しかしながら新自由主義の論理では対価に見合うお金が無くとも、クレジット(=信用)でお金を創造すれば商品を購入できてしまいます。さらに驚くのは、低収入で支払いの能力が低く返済が困難だと思われる人々にもクレジットを使わせ、万が一その人々が返済不可能に陥ってもクレジット会社が儲かるシステムが確立されているという点です。このような論理は、「信用なきクレジット」という矛盾した言葉を生み出します。返す力の無い人々にお金を貸したら儲かる、という奇妙なコトバです。ローンとしての奨学金は、まさに学生に対する、上記の「信用なきクレジット」ではないのでしょうか。

一方で返済不可能な学生のブラックリスト化を推進しながら、他方ではクレジットが回収不可能であっても利益を得る。そのロジックは、企業にとって二重の保険として機能するばかりか、学生間の生き残り競争を促進させ、資本を生む純粋な労働力としての「学生=労働者」を積極的に生産していきます。

学生自身もその規範を必死に内面化し、本来「墮落」し、「不能」で、「非効率」な学生という名付けからの脱却、すなわち一人前の「労働者」としてのK点越えをひたすら狙い続けながら滑空することを求められるのです。もし着地に失敗したら、もちろん自己責任ですが。

奨学金が学生の学問を豊かにする時代はもう終わったのでしょうか？(つてかそもそもそんなもの日本にかつてあったのか)。奨学金は自己を肥大化させる労働力をつくるための装置に成り下がってしまったのでしょうか。今回のシンポジウムで、ルー大のみならず、世界中の様々な大学において、大学のデパート化が進んでいることがわかりました。

しかし同時に、沖縄や東京だけではなく、日本中や世界中のあちらこちらで学生が本来の意味で学生として学生の自由を求め、声を上げていることもわかりました。一人では不安ですが、これだけ仲間が沢山いれば楽しくなりそうです。無いものはつくる。要らないものは放棄する。寝たいときに寝る。やりたいことをやる。怒るときに怒る！そのような手に余る存在が、本来の学生ではないのでしょうか。

色んな事をあきらめて
言い訳ばかりうまくなり
責任逃れで笑ってりゃ
自由はどんどん遠ざかる

——「ラインを越えて」
／ザ・ブルー・ハーツ(1987年)

